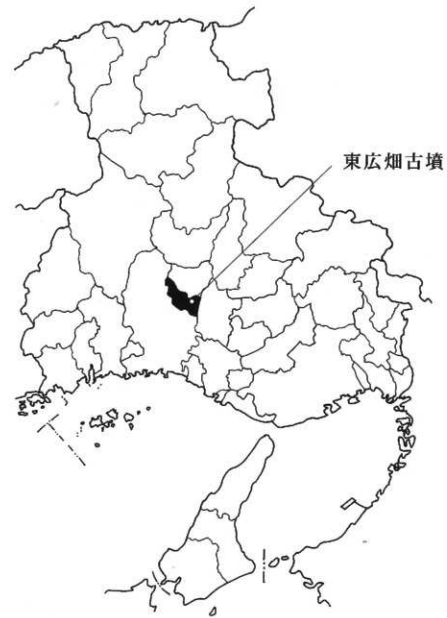


東 広畑古墳 I

2015

兵庫県神崎郡
福崎町教育委員会

東広畑古墳 I



東広畑古墳

2015

兵庫県神崎郡
福崎町教育委員会



整備前の東広畑古墳



整備後の東広畑古墳



石棺出土状況（奥壁に向かって）



石棺下土器出土状況（石室内開口部から）



古墳出土須恵器



裝飾壺 小像部分拡大



円頭大刀柄頭



耳環 (左)、勾玉 (右)



馬具

あいさつ

埋蔵文化財は、地下に埋もれた歴史を伝えてくれる大切な資料のうちの1つです。福岡市内には、約40基の古墳が存在していますが、発掘調査が行われた古墳は少なく、町内の古墳について知る手がかりが少ないのが現状でした。

県営ほ場整備に伴い、平成5年度、6年度、14年度、20年度と複数年かけて東広畑古墳の調査を行いました。調査前の古墳は、後世の削平によって墳丘がほとんど残っていない状態でしたが、古墳基底部の残りがよく、調査によって土器や鉄器等、豊富な遺物が副葬されていたこと、直径約16mの円墳であることが分かりました。このように、私たちに多くの情報をもたらしてくれていることから、平成9年に町の史跡に指定しました。

平成22年度には、兵庫県立考古博物館の協力を得て、一部の鉄器のX線写真撮影したところ、象嵌が施されている大刀が確認されました。その中に、亀甲繁単鳳文という県内でも類例のない模様が見つかったため、平成23年度から平成25年度にかけて、他の鉄器の保存処理を行い、その成果を展示等で公開しました。

本報告書の刊行によって、1人でも多くの方に東広畑古墳のことを知っていただき、福岡市、ひいては播磨地域の歴史を紐解くための資料にしていただければ幸いです。

最後になりましたが、調査や整理等の過程でご指導いただきました多くの方に厚くお礼申し上げます。

平成27年3月

福岡市教育委員会
教育長 高崎 十郎

例言

1. 本書は、神崎郡福岡町西田原字東広畑626に所在する東広畑古墳の発掘調査報告書である。
2. 調査は、福岡市教育委員会が主体となり実施した。
3. 経費については、平成5年度、平成6年度の調査は、兵庫県姫路土地改良事務所（現：兵庫県中播磨県民センター姫路土地改良センター）が負担し、平成14年度、平成20年度の調査は国庫補助金（総事業費の1/2）並びに県補助金（総事業費の1/4）を使用している。
4. 本書に使用した方位は、基本的に磁北を示している。
5. 周辺の遺跡分布図は、平成3年測量、平成18年改測・発行の「福岡市都市計画図（1/2,500）」を縮小、編集したものである。
6. 本書の執筆は、第1章、第2章、第3章第1節、第2節2、3を社会教育課 主事の樋口碧が、第3章第2節1を元福岡町文化財専門員の古田陽（現姓 小船井）（現：羽咋市教育委員会文化財室 主事）が行い、編集は樋口が行った。
7. 遺構の実測、写真は、発掘調査時の担当であった元社会教育課 係長の出田直が行った。
8. 遺物実測・写真は古田、樋口が行い、梶智美、渡辺昇（福岡町文化財審議委員・兵庫県まちづくり技術センター 副課長）の協力を得た。
遺物の洗浄・接合・復元・トレース、遺構のトレース等は古田が行い、梶の協力を得た。
9. 出土金属製品の保存処理は、耳環を兵庫県立考古博物館に協力いただき、それ以外を公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
10. 本報告に係る図面、写真、遺物等は福岡市教育委員会にて保管している。
11. 調査及び整理作業には数多くの方々や機関にご指導、ご助言をいただいた。感謝申し上げます。

本文目次

あいさつ・例言	
第1章 地理・歴史的環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査体制	4
第3章 調査報告	
第1節 遺構	5
第2節 遺物	
1 土器	9
2 金属器	17
3 その他	22
遺物観察表	23

図版目次

巻頭図版1 上 整備前の東広畑古墳	下 整備後の東広畑古墳
巻頭図版2 上 石棺出土状況(奥壁に向かって)	下 石棺下土器出土状況(石室内開口部から)
巻頭図版3 上 古墳出土須恵器	下 装飾壺 小像部分拡大
巻頭図版4 上 円頭大刀柄頭	下左 耳環、勾玉 下右 馬具
第1図 周辺の遺跡分布図	1
第2図 第1次調査位置図	6
第3図 トレンチ1～8土層図	6
第4図 前庭部遺物出土状況図	6
第5図 石室内断面図	7
第6図 石室床面平面図・側面図	7
第7図 石室内排水溝平面図	7
第8図 石棺下土器出土状況図	8
第9図 石棺実測図	8
第10図 出土土器1	10
第11図 出土土器2	11
第12図 出土土器3	12
第13図 出土土器4	13
第14図 出土土器5	15
第15図 出土金属器1	17
第16図 出土金属器2	18
第17図 出土金属器3	19
第18図 出土金属器4・その他遺物	21
写真図版1 遠景(東から)/全景(北から)/前庭部土器出土状況(東から)/前庭部土器出土状況(北から)/周溝検出状況/周溝確認調査状況	
写真図版2 石棺除去後状況/石棺下遺物出土状況/羨道部から奥壁(西から)/石室奥壁付近/耳環、高杯蓋出土状況/開口部から石室/石室内作業風景	
写真図版3 排水溝検出状況(西から)/排水溝検出状況(東から)/奥壁付近排水溝/石室内(西から)/復元作業(南西から)/復元作業(北東から)	
写真図版4 出土遺物1	
写真図版5 出土遺物2	
写真図版6 出土遺物3	
写真図版7 出土遺物4	
写真図版8 出土遺物5	

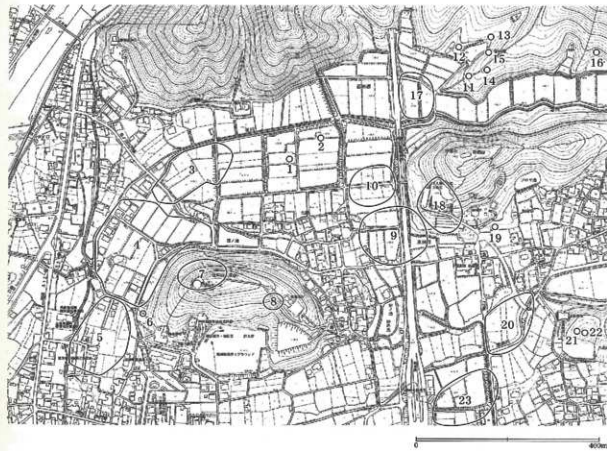
第1章 地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

福岡市は、兵庫県中央部よりやや南側に位置している。当町の東側には加西市、西及び南側には姫路市、北側には市川町が隣接する。

地理について、当町は中国山地のほぼ東端、播磨山地内の播磨側の市川と、但馬側の円山川を結ぶ谷筋、円山断層上に位置している。地形は、中国縦貫自動車道沿いに山崎断層があり、北側と南側の両山地間における幅約1kmの凹地帯になっている。当町は、このような播磨山地を縦・横断して走る重要な地形的凹地帯、円山断層と山崎断層が交会する重要な場所に位置している。当町を南北に貫流する市川周辺には谷底平野、河岸段丘が発達している。

調査地である西田原地区は、市川の東岸にあり、市川支流の雲津川、谷川が流れており、地形区分上は谷川と雲津川に挟まれた段丘と位置付けられる。東広畑古墳は谷川南岸に位置している。



第1図 周辺の遺跡分布図

1. 東広畑古墳
2. 東新田古墳
3. 西広畑遺跡
4. 上大明寺遺跡
5. 下大明寺遺跡
6. 宮山遺跡
7. 西広岡遺跡
8. 北広岡遺跡
9. 北野寺西遺跡
10. 北野寺山西遺跡
11. 大畑1号墳
12. 大畑2号墳
13. 大畑3号墳
14. 大畑4号墳
15. 池ノ谷中池遺跡
16. 尾藤古墳
17. 西田原穴田遺跡
18. 妙地山遺跡
19. 妙地山古墳
20. 加治谷藪下五反畑遺跡
21. ビクビク1号墳
22. ビクビク2号墳
23. 大門岡ノ下遺跡

第2節 歴史的環境

東広畑古墳周辺の遺跡は、町指定文化財 壺棺が出土した宮山遺跡(6)がある辻川山(宮山)を中心として、周辺の段丘上に分布している。大門ノ下遺跡(23)からは、縄文時代晩期の住居跡、縄文土器、石碑、石皿、磨石、蔽石が出土している。西原穴田遺跡(17)からは、縄文土器や石鏃、サヌカイト等が出土し、縄文集落の存在が示唆される。

弥生時代の遺構として、上大明寺遺跡(4)、北野寺山西遺跡(10)、西広畑遺跡(3)から集落跡が見つかった。また、北野寺西遺跡(9)からは、円形周溝墓が1基見つかった。辻川山頂上付近からは、弥生土器片が採取されており、弥生時代における当地域では、広範囲に遺跡が展開していると考えられる。

古墳時代の遺構として、古墳時代後期の古墳や集落遺跡が見つかった。東広畑古墳の100m東には、古墳時代後期の東新田古墳(2)が存在する。直径約16mの円墳で、須恵器、大刀、馬具、鉄鏃、勾玉、管玉が出土している。また、東広畑古墳と同様に銀象嵌が施された大刀が見つかった。近接したほぼ同時期の古墳から銀象嵌が施された大刀が見つかったことは、当時の古墳時代の他地域との交流のようすを考える上で重要である。周辺には、古墳時代後期の大畑群集墳(11~14)、尾森古墳(16)、直径20m以上の円墳であると考えられるピクピク1号墳(21)、2号墳(22)、古墳時代終末期には神崎郡内でも最大規模の妙徳山古墳(19)が存在する。妙徳山古墳は、直径約35mの円墳で、刀子や須恵器片が見つかった。また、妙徳山遺跡(18)からは、箱式石棺墓が確認されているが、時期は不明である。

大畑群集墳に近接する池ノ谷中池遺跡(15)からは、未完成である古墳時代の須恵器が見つかった。窯跡は確認されていないが、灰原である可能性が高い。当町では、古墳時代の窯跡は確認されていないが、当地域に古墳時代の窯跡の存在を示唆するものである。

古墳時代の集落遺跡では、加治谷敷下五反畑遺跡(20)から造り付けカマドを有した竪穴住居跡や総柱の独立柱建物が3棟見つかった。妙徳山古墳及びピクピク1号墳、2号墳の時期と同時期であり、これら古墳と関係する集落と考えられる。西広畑遺跡からは、溝状遺構が見つかった。集落遺跡の存在が示唆される。近接する東広畑古墳及び東新田古墳が西広畑遺跡の方に向かって開口していることから、両古墳を造営した人々の集落であると考えられる。

奈良時代以降の遺構として、北野寺西遺跡から平安時代の竪穴住居や中世の掘立柱建物、溝状遺構が見つかった。他、加治谷敷下五反畑遺跡から平安時代の独立柱建物が1棟見つかった。

参考文献

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 福岡町教育委員会町史編集室編 1995 | 『ふくさき史話』 |
| 福岡町立神崎郡歴史民俗資料館 1998 | 『福岡の埋もれた歴史Ⅰ~原地区~』 |
| | 福岡町立神崎郡歴史民俗資料館図録No.4 |

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

第1次調査 平成5年7月6日~8月31日(平成5年度)
調査に至る経緯

平成5年度当時には、すでに後世の削平を受け盛り土がなくなり、主体部である横穴式石室が外側から見られる状態となっていた。戦後しばらくの間は、ここにも墳丘が認められ、基底部も現在よりは分かる状況を示していたようである。しかし何時の頃からか、土が取られ、基底部の削平を受け、石室の石材のみが残存する状況になった。しかし、基底部の状況が耕作土直下で確認できる可能性があった。

景観ほ場整備事業が実施されることとなり、事業との調整を行うため、古墳の形態や範囲確認のための調査を実施することとなった。

調査方法

調査を行うにあたって、墳丘の規模を把握する必要があったため、ほ場整備により掘削される古墳の北側にトレンチを開け、調査を実施した。

掘削は地表からすべて人力にて行った。適宜、図化及び写真撮影にて記録をとった。

第2次調査 平成7年3月15日~3月29日(平成6年度)

調査に至る経緯

平成5年度に、ほ場整備事業が実施され、周辺は地形が激変していた。ほ場整備の際に調査を実施したが、1次調査は調査区が限定されていたため、古墳の規模や時期は、はっきりとしなかった。そこで一部にトレンチを開け、規模確定の調査を実施した。

調査方法

古墳南側にトレンチを開け、古墳の規模の把握及び遺物等の資料収集を行った。

掘削は地表からすべて人力にて行った。適宜、図化及び写真撮影にて記録をとった。

第3次調査 平成14年10月1日~平成15年3月31日(平成14年度)

調査に至る経緯

第1次調査、第2次調査により、古墳の形態と規模が確定し、古墳の時期を知るための資料を得ることができたため、平成9年度に土地が公有化され、町の指定文化財になった。しかし、石室について、調査後は現状維持としてきたところ、石材の劣化が著しく、危険が考慮された結果、古墳整備をすすめることとなった。

古墳の整備をすすめるに要する資料を得るため、石室及び石室内の状況を把握するための調査を実施した。

調査方法

石室内は埋土等で約1mの高さまで埋まっていたため、人力にて土をかき出す作業を行った。石室内に入っている作業であり、石材の崩落の可能性があったため、注意喚起しながら調査を実施した。

適宜、図化及び写真撮影にて記録をとった。

第4次調査 平成20年9月～12月(平成20年度)

調査に至る経緯

古墳の傷みが激しく崩壊の危険に陥ったことにより、古墳公園にすることによって石室の保護を図る計画を立て、古墳の石室内の状況を把握するための調査を実施した。

調査方法

人力掘削により調査を実施した。土器の出土状況、敷石の下部構造等を把握し、適宜、図化及び写真撮影にて記録をとった。

石棺部材は、狭い石室内では人力で持ち上げることが不可能であったため、奥壁の天井の開口した部分から石棺の部材を持ち上げ、移動した。

第2節 調査体制

第1次から第4次調査及び遺物・資料整理、報告書作成は、福岡町教育委員会を主体として、以下の調査体制で実施した。

○平成5年度

事務局 福岡町教育委員会

《教育長》 後藤 十郎

《社会教育課長》 尾内 伸行

《社会教育課主事》 出田 直

発掘調査担当

《社会教育課主事》 出田 直

○平成6年度

事務局 福岡町教育委員会

《教育長》 吉識 正明

《社会教育課長》 白井 爲次

《社会教育課主事》 出田 直

発掘調査担当

《社会教育課主事》 出田 直

○平成14年度

事務局 福岡町教育委員会

《教育長》 高岡 章三

《社会教育課長》 山口 省五

《社会教育係長》 木村 巧

《社会教育課主査》 出田 直

発掘調査担当

《社会教育課主査》 出田 直

○平成20年度

事務局 福岡町教育委員会

《教育長》 岡本 裕

《社会教育課長》 高井 紳一

《社会教育課副課長》 山下 健介

《社会教育係長》 出田 直

発掘調査担当

《社会教育係長》 出田 直

○報告書担当

《社会教育課文化財専門員》 古田 陽(現姓 小船井)(平成22年、23年度)

《社会教育課主事》 樋口 碧(平成25年、26年度)

《整理作業員》 梶 智美

第3章 調査報告

第1節 遺構(第2～9図)

東広畑古墳は、墳丘の残存状況が悪く、石室のみが残っている状態であった。側壁は比較的残存状況が良く、奥壁と天井石、開口部の一部が崩落していた。

前底部から須恵器無蓋高杯(32)、蓋(33、34)、短頸壺(36)、提瓶(37)、平瓶(41)が出土した。また、開口部からは短頸壺(35)が検出されており、埋葬後の祭祀に用いられた可能性が考えられる。

古墳の規模や形態を明らかにするため、第1次調査で古墳北側に、第2次調査で古墳南側にトレンチを開けたところ、直径約1.6mの円墳であるということが分かった。ただし、地形の制約を受け、不整形を呈していると考えられる。

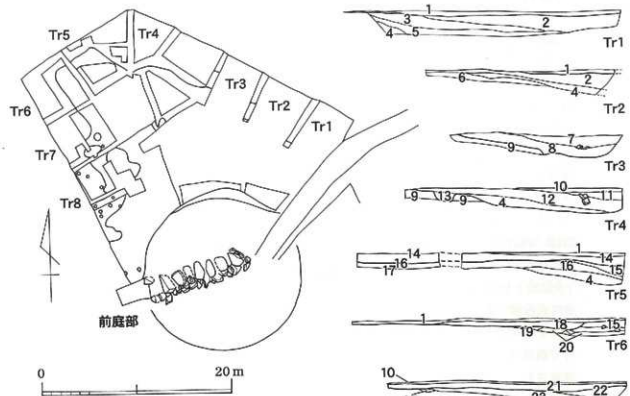
埋葬施設は、西方向に開口する無袖式の横穴式石室である。現状のまま石室を保存するために古墳整備工事を計画し、石室の石材を取り除かなかったため、石室の掘り形は不明である。

石室残存長は約1.0m、幅は奥壁付近で約1.6m、開口部付近では約1.5m、最大幅約1.7mの胴張型の横穴式石室である。奥壁は、2石が残存しており、落下していた石材を用いて復元すると、残存している2石の上にやや小ぶりの石材を据えて構成されていた可能性が高い。左側壁の基底石は10石で構成され、幅1m、高さ40～70cm程の石材を据えていた。右側壁の基底石は11石で構成され、左側壁と同様に幅1m、高さ40～70cm程の石材を据えていた。両側壁とも4段で構築されているように見受けられるが、上段にいくほど石材が小ぶりになっていた。

石室床面には直径10～20cm程度の円礫が敷き詰められていた。第4次調査で、それら敷石を取り外したところ、排水施設が確認できた。残存長1.03m、幅2.0～3.0cm、深さは奥壁側で約3cm、開口部付近で約5cmであった。奥壁から約50cmのところまで直径約30cmのピットが検出されたが、性格については不明である。

奥壁から開口部に向かって約5.8mのところでは組合せ式石棺の底石と小口石が1枚残存していた。石棺を移動させたところ、須恵器有蓋高杯(18、19、22)、坏身(10、12、13)、鉄製の刀と考えられる刃先部分(M13)を検出した。石棺の破片が奥壁近くから検出されたため、石棺の追葬後に移動された可能性が高い。

石棺の石材は、「高室石」と呼ばれる加西市高室産の凝灰岩質砂岩が用いられている。

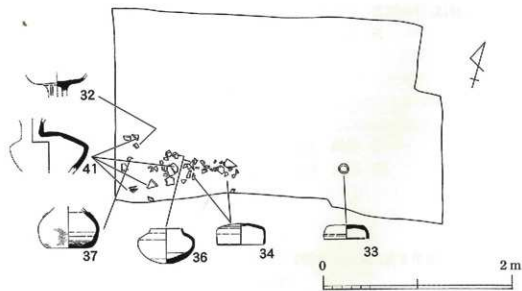


第2図 第1次調査位置図

1. 暗茶褐色土 2. 明黄白色土(レキ混じり) 3. 淡茶灰色砂質土
4. 暗茶灰色土 5. 淡茶灰色土 6. 明黄白色レキ層 7. 暗赤茶色レキ層 8. 暗灰色レキ混じり 9. 明黄色レキ層 10. 暗灰色土
11. 暗灰色土(明白黄色粘土混じり) 12. 暗赤褐色砂レキ土
13. 淡暗灰色土(小石混じり) 14. 暗茶色レキ混じり土 15. 明黄白色土
16. 淡茶灰色土 17. 明黄茶色レキ層 18. 暗茶褐色レキ混じり土
19. 明黄茶色粘質土 20. 明黄灰色色砂層 21. 暗茶褐色土
22. 暗黄茶色土 23. 明灰色土 24. 暗黄灰色粘質土 25. 明黄白色粘土(地山)
26. 明黄色粘土 27. 明黄白色粘質土



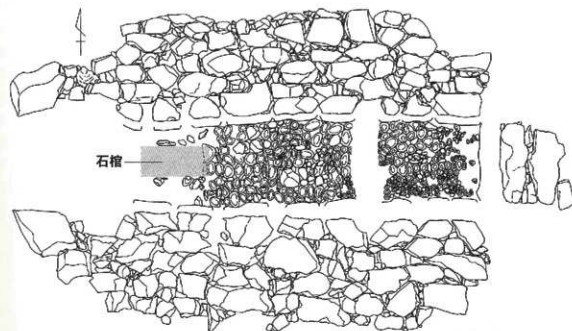
第3図 トレンチ1~8土層図



第4図 前庭部遺物出土状況図



第5図 石室内断面図

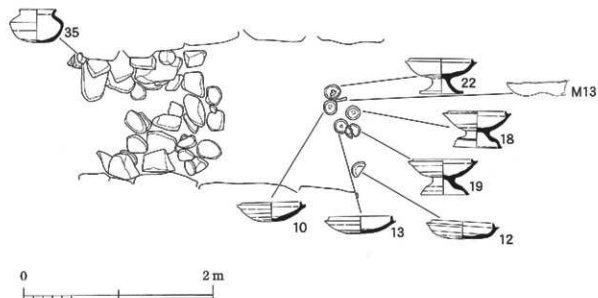


第6図 石室床面平面図・側面図

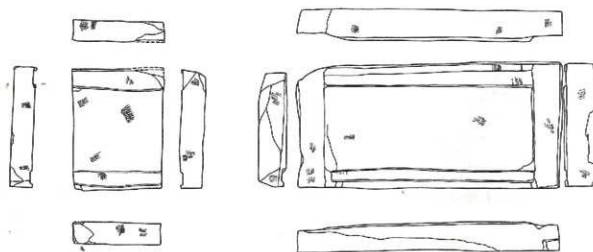


第7図 石室内排水溝平面図

0 2m



第8図 石棺下土器出土状況



第9図 石棺実測図

第2節 遺物

1. 土器 (第10~14図)

須恵器

器種は、坏蓋、坏身、有蓋高坏、無蓋高坏、短頸壺、壺、提瓶、平瓶等がある。このうち、出土地点が分かるものは、非常に少なく、石棺下からの出土は、有蓋高坏類である。平瓶や短頸壺は、前庭部から出土している。古墳内部出土の須恵器は、完形品に近い姿に復元できるものが多かった。裝飾付須恵器については、接合できる部分が限られ、他に同一個体と判断できる破片資料が少ないのが特徴的である。

坏蓋は、法量が口径13.2cm~14.4cmのものが大半である。外面の天井部と口縁部の境界を特に意識しないものがほとんどで、口縁部は、やや内傾する鋭い端面を持つもの(4)と、やや丸みを持つもの(2、3、5)がある。蓋の天井部には、工具痕跡を残すものがある。

坏身は、立ち上がりがやや短く、内傾し、矮小傾向が著しいものがほとんどである。平底状の底部から緩やかに外方に開くもの(7、12、13、16)、体部の形状が丸みを持ち、壁高が比較深いもの(9、10、11、14、15)と、皿形を呈し、器高の浅いもの(8)等が混在している。底部外面は、回転ヘラケズリを施しているものが多い。13はヘラ記号があり、14、15はヘラケズリが弱く、ヘラケズリの後に仕上げナデを施している。

蓋(17)は、有蓋高坏の蓋と考えられるが、セット関係は不明である。つまみは、中窪み扁平なもので、天井部と口縁部との境界はわずかに屈曲が見られ、端部はやや丸みを持つ。

有蓋高坏は、ほぼ完形のもの5個体確認でき、短脚のもの(18~22、24、25)である。坏部は、内傾する短い立ち上がり、脚部は、短脚で透かし孔を持たない。脚部の形状は、内側に屈曲して段をなすもの(18、19、20、26、27)、漏斗状に大きく外反するもの(21、22)がある。23は長脚のものである。26は別の器種の脚部の可能性がある。

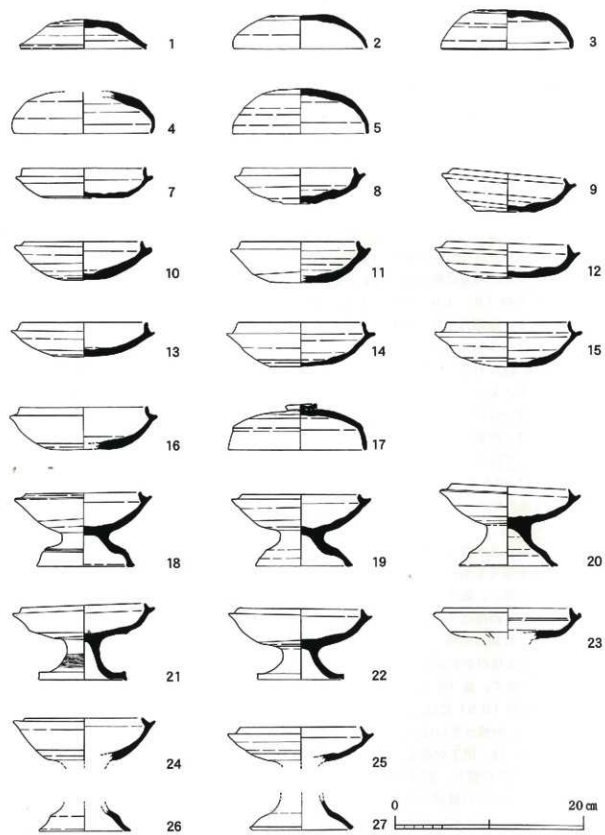
なお、有蓋高坏の出土地点は、石棺下の埋土中から見つかっており、埋葬当時のようすを示す資料である。

無蓋高坏(28~32)は、いずれも長脚である。坏部は、2段に突出した稜を付け、その間に刺突文を巡らすもの(31)がある。全体に器壁が薄く、ていねいに作られている。坏底部の器壁は分厚い。脚部(28、30~32)は、2段の長方形の透かしが2方または3方に穿たれている。脚部は、スカート状に開き、器壁が非常に薄く長脚である。

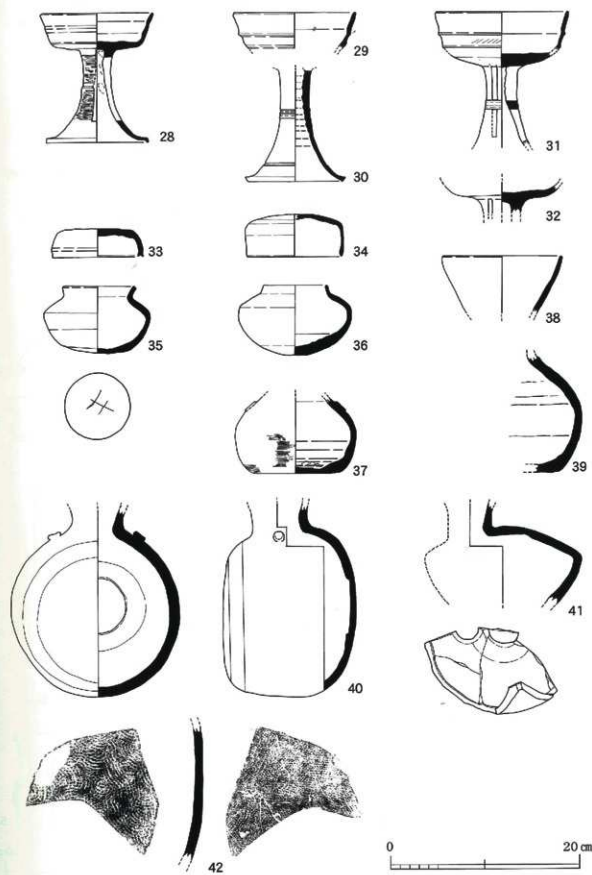
短頸壺は、口縁部が開くもの(35)と、短く直線的に内傾するもの(36)がある。どちらも体部の最大径がやや肩部に位置する。蓋(33、34)は、どちらも直線的なもので、回転ヘラケズリを施す。蓋(34)は、焼成の様相が他のものと異なるため、搬入されたものの可能性がある。底部(35)には、記号が見られる。37は提瓶、39は壺であると考えられる。口縁部片(38)しか残っていないが、非常に薄く精巧に作られている。

提瓶(40)は、把手が退化し、丸いボタン状のもので、全体にカキ目調整されている。平瓶(41)は、肩部が張り、胴部は円盤閉鎖の後、中心から4cmのところ径2.5cm程度の孔を開け、別作りの口縁部を接合する。

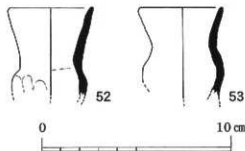
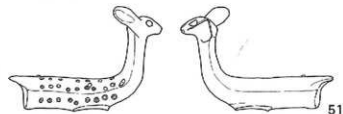
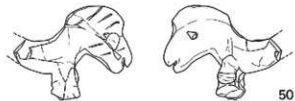
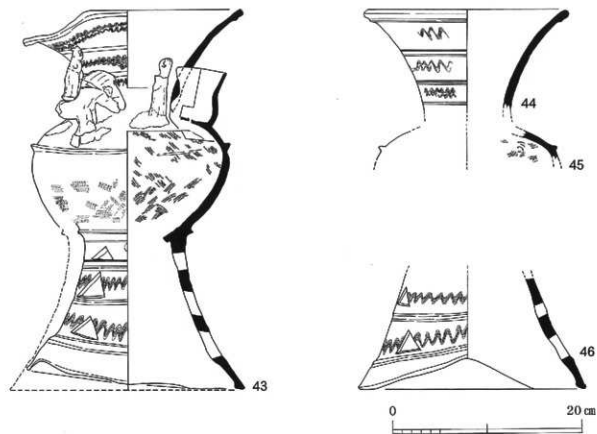
須恵器大甕(42)は、内面には同心円状の当て具の痕跡、外面には叩き板の痕跡が残っている。他に、接合できるような破片資料は、ほぼない。隣接する東新田古墳からは、同様タイプの甕が出土しており、復元できる程の破片が残る。



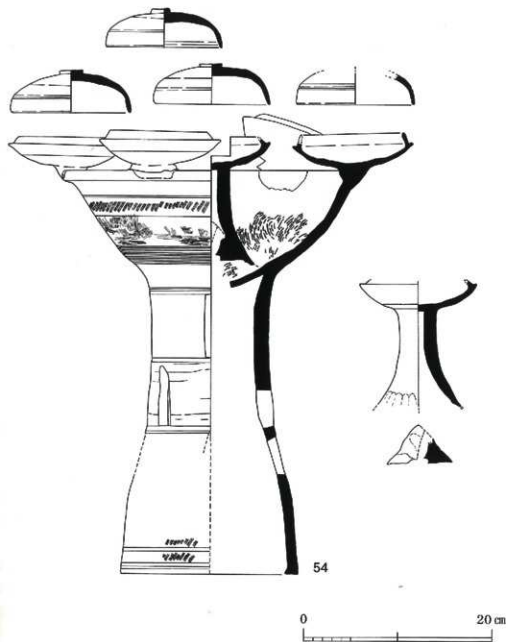
第10圖 出土土器 1



第11圖 出土土器 2



第12图 出土土器 3



第13图 出土土器 4

装飾付須恵器

特異な遺物として、装飾壺2個体と手持器台1個体が見つかった。出土地点については、詳細は不明だが、第3次調査で見つかった。

まず、接合関係から、装飾壺であると考えられる。そのうち1個体(44、45、46)は、裏器である壺の体部から脚部上端を欠損しているため、直接接合しないが、器高約40cmの大型品と考えられる。もう1つの装飾壺(43)は、口径23.1cm、器高40.2cm、底径22.5cmの波状文を持つ広口壺で、体部中位よりやや上部に突帯が巡らされ、壺と台脚の間にも突帯がある。台脚の長さは、やや長脚で三角(やや二等辺三角形)の透かしが3段ある。脚部壺も壺の口縁部同様ゆがみがある。台付壺の突帯の上部で壺の小壺や人物、動物等の小像を配置している。

小壺(53)自体は、あまりくびれを持たず、口縁と体部最大径が同径で、器壁が薄い。小壺の底部は、少しカットされ、壺肩部の傾斜に合うように接合されている。小壺の配置より、3個体はあると考えられ、2個体が残存する。小壺の間に小像が配置されていると考えられる。いずれも壺本体から遊離した状態で出土したが、剥離痕から47、50が接合できた。

小像が壺の肩部表面に付けられており、人物(47)と馬(50)に乗る人物(48)は、どれも手ずくねで成形されており、非常に精巧に作られ、細部にわたるまでいいねいに作られている。

人物(47)は、高さ4.8cm、左向きで馬と人物の方向に体を向けている。顔には、目、口、鼻が表現され、顔の横からは両耳のようにつまみ出したものが、髪を両サイドに束ねたみずらの表現であると考えられる。手足が欠損しているが、腕を上方向に上げていると考えられる。

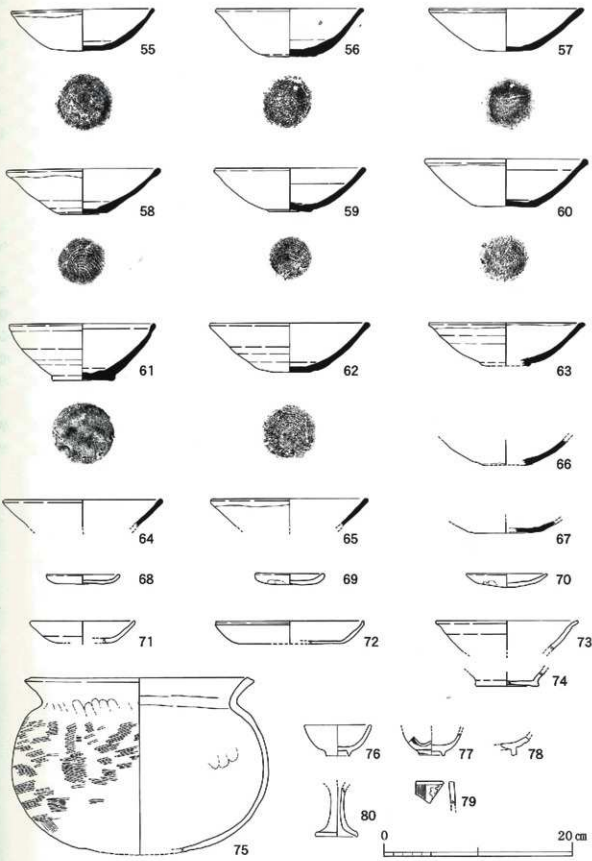
馬に乗る人(48)は、高さ5.05cm、右向きである。2つ穴で目を、目の下の2つ穴は、鼻を表現しているものか不明である。目、口、首のへこみがあり、両手の袖が見える。頭部は、三角形になり、頭頂部に施軸、または0.4cm弱の丸い粒が付いていて、1つに髪を丸めている可能性も考えられる。

馬(50)は、人の大きさと比較するとやや大きく、表面については、口には手綱、背中には鞍等の馬飾りや鬘表現が描かれているが、裏面にはなにも描かれていない。製作当初から意識して製作している可能性がある。

馬に乗る人は、ぎりぎり接合部分があり、馬に乗っていることが分かった。

接合できなかった小像(49、51)や小壺(52)があるが、壺に附着すると考えられる。人物の頭部(49)は、他の人物に比べて明らかに大きさが異なり、目、口、鼻がいいねいに櫛等の棒状のもので突いて表現されており、頭部は、面取りしている。

壺(51)の大きさは、5.5cm×8.1cmで、全体が手ずくねで製作され、細かい部分を作りこんでいる。まず、体部の斑点模様については、0.2cm弱の小さい竹管状のもので差し込んである。二ホンジカの夏毛は、茶褐色に白い斑点が入った模様をしており、これを鹿の子と呼び、夏の季節語にもなっており、この表現を行っていることから、「夏」の時期を示す可能性もある。体全体では、首が曲線状に延び、少し長いように感じる。鹿の前脚は、欠損しており、後脚については、元々表現されておらず、脚を曲げ座っている表現と思われる。顔の表現は、目や鼻は、穴が開けられ、耳は後で付着させている。鹿は、壺に附着していない。しかし、馬と同様表面はいいねいな細工をしているものの、裏面については、体の斑点の表現がない。おそらく、壺側の陰部分になる面については、表現の簡略化を行っていると考えられる。そのことから、鹿も壺に附着すると考えられ、製作上、小壺と小像も壺と同じ工房で作られていると考えられる。



第14図 出土土器5

このような装飾蓋は、岡山・愛媛・兵庫・大阪・和歌山等からは、人物の小像が付けられているタイプが出土しており、特に播磨地域では、人物が付いた資料が豊富に見つまっている。

子持器台(54)は、体高42.8cm、口径31.6cmの鉢部を持つ。坏と蓋のセット関係が正確には分からないが、自然軸の振り方や傾き加減等からセット関係が伺えるものがある。高坏形器台の縁辺に坏6、中央に高坏1基を置く。坏は、高坏の脚部を器台の鉢部に接合する。坏蓋には、つまみがある。親器は、大きい鉢形の容器の役割を持ち、焼成の影響か、一部の子器にゆがみがあり、台脚は、焼成が不良で内外面ともに赤みのある色味をしている。器台はやや長脚で、長方形の透かしが2段あり、脚部の器壁は、非常に分厚い。

これら土器から、当古墳の最終埋葬時期は、TK209併行期であると考えられる。

中世以降の土器

中世の東播系の須恵器埴(山茶埴)(55~67)である。個体数は、破片資料も含めると12~14個体と考えられる。重ね焼き痕跡や胎土が似ていることから同一窯で焼かれたもので、東で持ち込まれた可能性がある。器形は、埴タイプのもの(56、58、59、61、63)と、やや丸い底からハの字状に大きく開くもの(55、57、60、62)がある。ほぼすべての外面の口縁部に重ね焼きの痕跡が残る。口縁端部は、やや膨らみを持つものや玉縁のものがある。底部が糸きりのもので、やや小さい高台を持つものもないもの等がある。63、66のみ白っぽく、色調が他のものと異なる。山茶埴の時期は、12世紀半ばから12世紀後半のものである。土師器皿(68~72)、埴(73、74)、埴(75)についても同様の時期のものと考えられる。

近世陶磁器類(76~80)は、広東碗、端反碗、小杯、猪口、仏飯器等があり、生活雑器が少ないという器種の偏りが見られた。図化を行っていないが、肥前の碗類や供養系の陶磁器類が数は少ないが出土している。

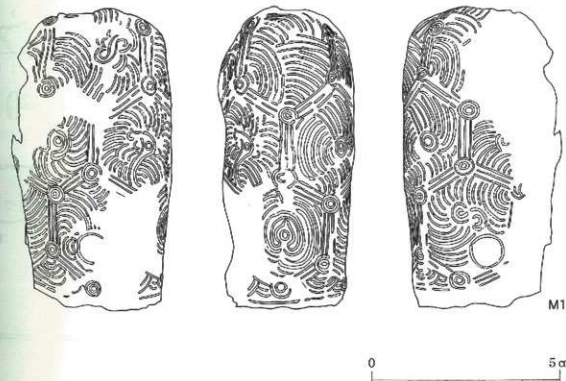
2. 金属器 (第15~18図)

種類は武器・馬具・農具・装身具等があり、すべて石室内部から出土している。耳環の一部は床面直上、鉄器の一部は奥壁側から出土しているというように、記録がないため漠然とした出土位置しか分かっていない。

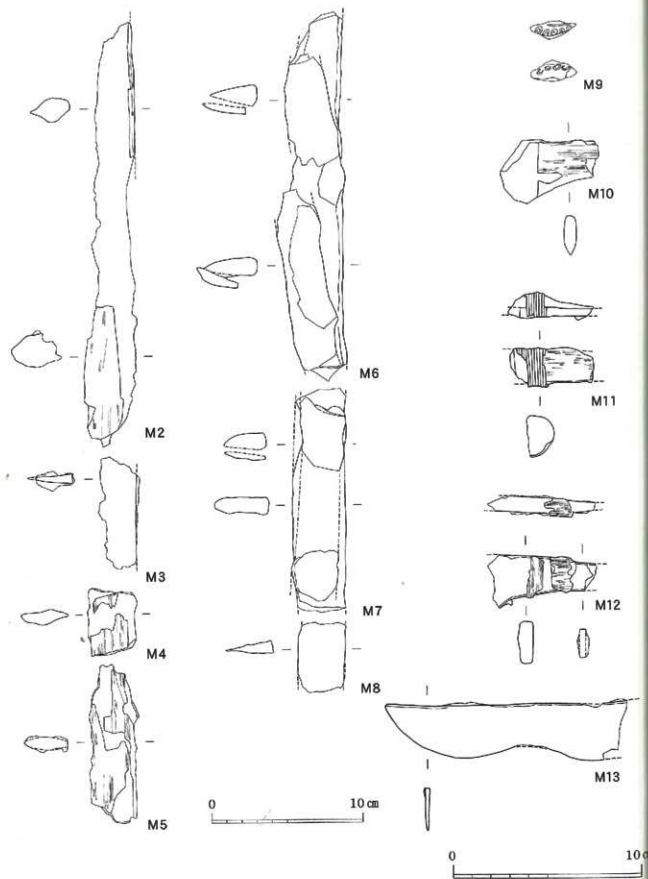
鉄器については残存状況が良好でないものがほとんどであるが、一部の馬具に鍍金が施されていることが確認できた。平成22年度に、兵庫県立考古博物館の協力を得て、柄頭を含む土と錆で覆われた鉄器の一部についてX線照射したことにより、鉄器の種類等が分かった。円頭大刀柄頭については、目釘孔と象嵌の存在が確認できた。保存処理は、平成22年度から平成25年度に(公財)元興寺文化財研究所に委託し、実施した。

M1は円頭大刀柄頭である。横断面が倒卵形を呈しており、頭頂部がやや陥没しているが、その他、構造的には壊れておらず、内部には空洞があり、木質が挟まっているようすが伺える。象嵌には銀が埋め込まれており、支点の環文が二重円、連結線が3本線で構成される亀甲繫文の中に鳳凰文が配される。鳳凰文は左向きで、嘴と目が表現されているものが数箇所認められるが、一部は翼部がハート形文となっている箇所、鳳凰文の頭部が二重円に簡略化されている箇所やS字状文で表現されている箇所がある。また、亀甲繫文の内部は旋毛状文で構成される。

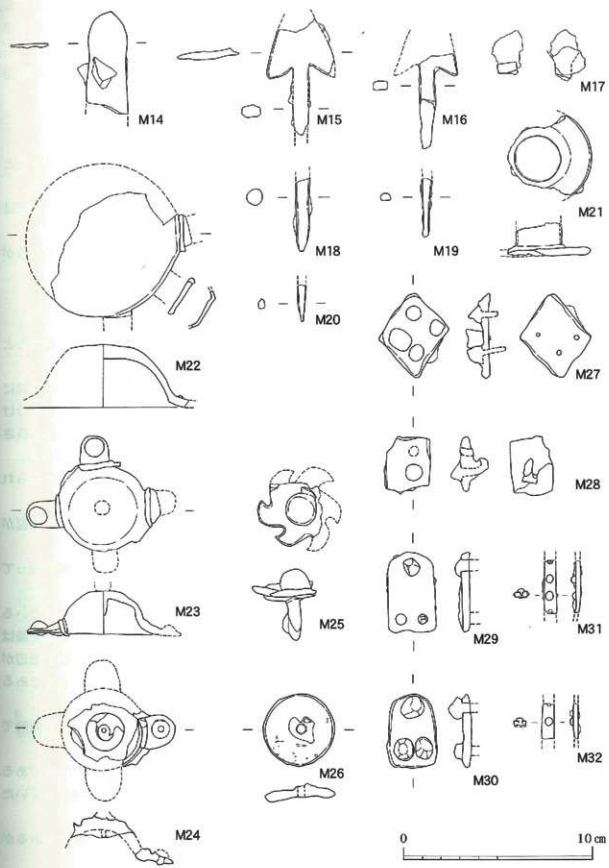
旋毛状文はシメトリックに表現されていない。目釘孔を取り囲む区画があり、1箇所は一重円文、もう1箇所は花文で飾られている。



第15図 出土金属器1



第16图 出土金属器 2



第17图 出土金属器 3

M2～M8、M10は大刀の刀身部分である。M2、M4、M5、M10には木質が認められる。M6とM7は、2振の大刀が重なりあっていることから、合計で少なくとも3振の大刀が副葬されていたと考えられる。

M9は銀象嵌が施された大刀の鈎の一部であると考えられる。C字状文と1本の線刻が確認できる。

M11は刀子である。木質と銀線が1/2残っている。

M12は刀子である。木質が残っており、関部である。

M13は刀であると考えられる。二等辺三角形の断面を呈していることから刃部であると判断した。曲線状の部分が刃部である。残存長は12.8cmあるが、全体像は不明である。

M14～M16は鉄鐙の鐙身部である。M14は鐙身部の先端しか残っていないため、型式は不明であるが、M15、M16は逆刺を有した平根の三角形鐙である。

M17は小片であるが、長頸鐙の鐙身関部の可能性がある。平根鐙は3点見つまっているがM17が長頸鐙の可能性を示すのみで、他に長頸鐙は見つかっていない。

M18～M20は鉄鐙の基部であると考えられる。

M21は不明である。中央部は空洞で、立ち上がり部分からは錫が検出されている。

M22は雲珠である。鉢部は半球状で、脚は残存状況が悪く残っていないが、8脚あったと考えられる。鉢部の復元径は8.0cmで高さは3.3cmである。

M23は辻金具である。鉢部は半球形で稜をもつ半球状有稜鉢である。稜は脚部と頂部の中間に見られ、体部断面は直線状である。鉢部径は4.7cm、高さ2.3cmで、頂部に飾りをつけるが、宝珠形飾りは欠損しており、鉢の脚部が残っているのみである。脚は幅1.6cm、長さ1.6cmの半円形4脚で、鉢と一体に作られ、径1cm、高さ0.4cm程の1鉢で留める。

M24は金銅装の辻金具である。鉢の復元径4.5cm、宝珠形飾りを有していたと考えられ、欠損しているが、痕跡から鉢頭の径は0.7cmである。

M25は金銅装の飾金具の座金具である。球形の鉢頭で、座金具は巴状の形、6つの突起があると考えられる。

M26は金銅装の飾金具である。座金具は完存しており、中央に穿孔されている痕跡が残っている。

M27～M30は革金具である。M27は金銅装で、菱形の鉄板に4本の鉾が付いている。M28は欠損しているため全体像は不明であるが、鉾が2本確認でき、そのうち1本の先端は曲がっている。鉾高0.8cm、径0.9cmである。M29、M30はいずれも片側の短辺が弧状になっており、鉾が3本ずつ確認できる。M29の鉾高は0.3cm、径0.9cmである。

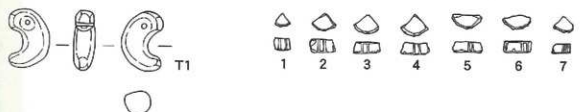
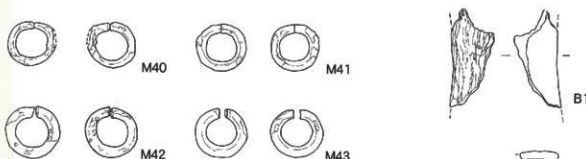
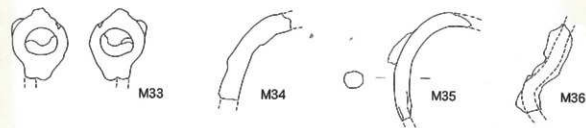
M30は金銅装で鉾高0.7cm、径1.0cmである。

M31、M32は鞍の縁金具であると考えられる。幅0.6cmの鉄板に、0.8cmの間隔で鉾が打たれている。鉢頭は銀装、鉄板は金銅装である。

M33～M36は轡である。素環鏡板付轡と考えられ、M35の環の直径は約7.5cmである。M33は引手金具であると考えられ、M34、M35の素環鏡板付轡に引手金具が連なっていた可能性がある。M36は、兵庫鎖の一部である可能性がある。

M37、M38は針金状の鉄器である。兵庫鎖が重なり合った状態である可能性もあるが、直径が0.2cmと細いため、不明である。

M39は不明である。



第18図 出土金属器4・その他遺物

M40～M43は耳環である。M40は床面から20 cm程度残したベルトの中から、M41は床面直上から見つかった。M42、M43の出土地点は不明である。M42のみの銅芯金貼であり、他は銅芯金貼である。

M40は復元長径2.6 cmで、短径2.3 cm、接面は0.1 cmで絞り込んでいる。断面は、径0.4 cmである。

M41は長径2.6 cmで、短径2.5 cm、接面は0.05 cmで、断面は、長径0.5 cmである。

M42は長径3.0 cmで、短径2.8 cm、接面は0.1 cmで絞り込んでいる。断面は、長径0.6 cmである。

M43は長径2.8 cmで、短径2.6 cm、接面は0.3 cmで、断面は長径0.6 cmである。

3. その他 (第18図)

玉類はT1の勾玉1点のみである。ガラス製で、青色を呈している。穿孔は両面から施される。B1は人骨であり、出土場所は不明である。

その他1～7は無機質のもので、成分は硫酸カルシウムである。焦げたような臭いがあり、敷石の隙間と奥床面上から出土した。

遺物観察表 土器観察表

番号	風土	器種	遺跡	測量 (cm)			内	備考
				口径	高さ	厚		
1	須賀郡	埴		132			銅貼ヘラクスリ	
2	須賀郡	埴	石室内壁土	141	3.85		銅貼ヘラクスリ	
3	須賀郡	埴		137	4.3		銅貼ヘラクスリ	
4	須賀郡	埴		(144)	第 4.4		銅貼ヘラクスリ	
5	須賀郡	埴		143	4.37		銅貼ヘラクスリ	
7	須賀郡	埴	石室内土	(132.2)	3.1	(9.6)	銅貼ヘラクスリ	
8	須賀郡	埴		118	3.75	7.4	ヘラ削り表面磨	仕上げナデ
9	須賀郡	埴		119	4.5	6.4	ヘラ削り表面磨	
10	須賀郡	埴	石塚下2	124	4.05	6.3	銅貼ヘラクスリ	
11	須賀郡	埴		125	4.35	6.7	銅貼ヘラクスリ	
12	須賀郡	埴	石塚下	130	3.9	8.6	銅貼ヘラクスリ	仕上げナデ
13	須賀郡	埴	石塚下5	132	3.5	5.6	銅貼ヘラクスリ	仕上げナデ
14	須賀郡	埴		133	4.75	7.3	銅貼ヘラクスリ	仕上げナデ
15	須賀郡	埴		130	4.8	7.9	銅貼ヘラクスリ	仕上げナデ
16	須賀郡	埴		(133)	4.65	(6.8)	銅貼ヘラクスリ	
17	須賀郡	埴		145	4.9		銅貼ヘラクスリ	カキ目
18	須賀郡	有蓋蓋	石塚下3	121	7.8	10.3	銅貼ヘラクスリ	仕上げナデ
19	須賀郡	有蓋蓋	石塚下4	126	7.8	10.3	銅貼ヘラクスリ	
20	須賀郡	有蓋蓋		124	8.8	10.4	銅貼ヘラクスリ	
21	須賀郡	有蓋蓋	石塚下	132	8.1	9.95	銅貼ヘラクスリ	
22	須賀郡	有蓋蓋	石塚下1	132	7.5	10.1	銅貼ヘラクスリ	ユビオサエ
23	須賀郡	有蓋蓋		(134.0)	第 3.3	(11.2)	銅貼ヘラクスリ	
24	須賀郡	有蓋蓋		(124.0)	第 4.6	(7.8)	銅貼ヘラクスリ	
25	須賀郡	有蓋蓋		(124.0)	第 3.7			
26	須賀郡	有蓋蓋			第 2.45	(9.6)		
27	須賀郡	有蓋蓋			第 3.25	(11.0)		
28	須賀郡	有蓋蓋		(11.8)	13.76	(10.8)		
29	須賀郡	有蓋蓋		(13.0)	第 3.8			
30	須賀郡	有蓋蓋	石室内土			(10.0)		
31	須賀郡	有蓋蓋		(14.0)	第 14.05		割欠	
32	須賀郡	有蓋蓋	前庭部		第 3.2			
33	須賀郡	蓋	前庭部	9.7	3.05		銅貼ヘラクスリ	仕上げナデ
34	須賀郡	蓋	前庭部	4.45			銅貼ヘラクスリ	
35	須賀郡	短冊	石室入口	8.0	7.15	6.65	蓋部未施磨	ナデ
36	須賀郡	短冊	前庭部	(6.5)	7.4	7.8	蓋部未施磨	蓋部具備
37	須賀郡	短冊	前庭部		第 8.1	(9.4)	カキ目	外壁に自然磨
38	須賀郡	短冊	前庭部		第 12.5			内外面に自然磨
39	須賀郡	短冊	前庭部		第 20.5	17.9	カキ目	外壁に自然磨
40	須賀郡	短冊	前庭部		第 10.5			
41	須賀郡	短冊	前庭部		第 15.6			
42	須賀郡	短冊	前庭部	23.1	40.2	22.5	タタキ目	同心円タタキ目
43	須賀郡	短冊	前庭部	(22.1)	第 11.2		割欠	砂がみあり
44	須賀郡	短冊	前庭部		第 3.4			
45	須賀郡	短冊	前庭部	24.0	第 11.2			同心円タタキ目
46	須賀郡	短冊	前庭部		43×13		割欠	砂がみあり
47	須賀郡	短冊	前庭部		5.05×14			小瓶 (人物)
48	須賀郡	短冊	前庭部		3.6×2.0			小瓶 (人物)
49	須賀郡	短冊	前庭部		6.3×3.6			小瓶 (人物)
50	須賀郡	短冊	前庭部		5.5×8.1			小瓶 (人物)
51	須賀郡	短冊	前庭部		4.4	4.7		小瓶
52	須賀郡	短冊	前庭部	4.6	4.9			小瓶
53	須賀郡	短冊	前庭部	42.5	31.6			
54	須賀郡	短冊	前庭部	19.0	4.4	8.8		同心円タタキ目
55	須賀郡	短冊	前庭部	15.5	5.05	5.7		割欠ナデ
56	須賀郡	短冊	前庭部	18.0	4.5	5.4		割欠ナデ
57	須賀郡	短冊	前庭部	16.1	4.8	5.5		割欠ナデ
58	須賀郡	短冊	前庭部	(18.0)	4.75	4.5		割欠ナデ
59	須賀郡	短冊	前庭部	(17.0)	第 5.05	(5.6)		割欠ナデ
60	須賀郡	短冊	前庭部	16.3	6.0	6.4		割欠ナデ
61	須賀郡	短冊	前庭部	(17.0)	5.15	(8.4)		割欠ナデ
62	須賀郡	短冊	前庭部	(18.4)	4.45	(9.2)		割欠ナデ
63	須賀郡	短冊	前庭部	(18.8)	第 2.9			割欠ナデ
64	須賀郡	短冊	前庭部	(18.5)	第 2.9			割欠ナデ
65	須賀郡	短冊	前庭部	第 2.75		(8.5)		割欠ナデ
66	須賀郡	短冊	前庭部	第 1.1		(7.5)		割欠ナデ
67	須賀郡	短冊	前庭部		第 1.1			割欠ナデ
68	須賀郡	短冊	前庭部	(7.0)	1.05	(8.2)		ユビオサエ
69	須賀郡	短冊	前庭部	(7.2)	1.2	(8.0)		ユビオサエ
70	須賀郡	短冊	前庭部	(8.0)	第 1.4	(4.0)		
71	須賀郡	短冊	前庭部	(11.0)	第 2.3	(8.4)		
72	須賀郡	短冊	前庭部	(8.6)	2.4	(11.0)		
73	須賀郡	短冊	前庭部	(15.0)	第 3.2			
74	須賀郡	短冊	前庭部		第 1.5	(8.6)		
75	須賀郡	短冊	前庭部	(24.3)	第 18.8		タタキ	
76	須賀郡	短冊	前庭部	7.0	3.2	2.6		
77	須賀郡	短冊	前庭部		第 2.4	2.6		
78	須賀郡	短冊	前庭部		第 1.6			
79	須賀郡	短冊	前庭部		第 2.5			
80	須賀郡	短冊	前庭部		第 5.3	4.4		

出土金属器 法量表

番号	種別	分類	器種	遺構	全長 (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	備考
M1	鉄器	武器	大刀柄頭	石室床面	柄 8.0	4.0	3.4	鍔巻装
M2	鉄器	武器	大刀		柄 28.2	柄 3.4	2.0	木葉
M3	鉄器	武器	大刀	1北	柄 7.45	柄 2.5	0.6	
M4	鉄器	武器	大刀		柄 4.5	柄 3.3	0.5	木皮
M5	鉄器	武器	大刀	1北	柄 10.5	柄 3.3	0.9	木葉
M6	鉄器	武器	大刀	石室床面	柄 24.6	3.5	1.4	2葉
					柄 12.1	3.0	0.5	
M7	鉄器	武器	大刀	石室床面	柄 7.5	3.1	0.5	
					柄 14.9	3.5	1.1	2葉
M8	鉄器	武器	大刀	石室床面	柄 4.8	3.0	0.4	
					柄 4.7	3.1	0.9	
M9	鉄器	武器	大刀		柄 2.5	柄 1.1		鍔巻装
M10	鉄器	武器	大刀		柄 5.2	柄 3.5	0.8	木葉
M11	鉄器	農工具	刀子		柄 4.5	2.1	1.3	鍔巻 木葉
M12	鉄器	農工具	刀子	溝2	柄 5.7	柄 3.0	0.4	木葉
M13	鉄器	武器	刀か	石階下	柄 12.8	3.0	0.3	
M14	鉄器	武器	短劍		柄 5.5	2.2	0.2	
M15	鉄器	武器	短劍		柄 6.2	2.6	0.7	
M16	鉄器	武器	短劍		柄 5.0	柄 2.0	0.5	木葉
M17	鉄器	武器	短劍		柄 2.7	柄 1.5	0.6	
M18	鉄器	武器	短劍		柄 3.8	0.8	0.9	
M19	鉄器	武器	短劍		柄 3.1	0.5	0.95	
M20	鉄器	武器	短劍		柄 1.95	0.5	0.5	
M21	鉄器	不明	不明		柄 4.4		柄 1.8	鍔
M22	鉄器	馬具	雲橋		柄 7.4		3.3	
M23	鉄器	馬具	辻金具		柄 7.1		柄 2.3	
M24	鉄器	馬具	辻金具		柄 5.6		柄 2.9	金網装
M25	鉄器	馬具	鞍金具		柄 3.4	柄 3.4	3.7	金網装 巴状
M26	鉄器	馬具	鞍金具		3.8		0.4	金網装
M27	鉄器	馬具	革金具		4.5	3.7	2.1	金網装
M28	鉄器	馬具	革金具	石階下	3.0	2.5	1.9	
M29	鉄器	馬具	革金具		4.2	2.7	0.7	
M30	鉄器	馬具	革金具		3.9	2.8	1.1	金網装
M31	鉄器	馬具	鞍金具	溝2	柄 2.85	柄 0.6	0.5	金網装 紐は綴結
M32	鉄器	馬具	鞍金具	溝2	柄 1.9	柄 0.6	0.4	金網装 紐は綴結
M33	鉄器	馬具	轡		柄 3.9	3.0		
M34	鉄器	馬具	轡		柄 5.5	1.1		
M35	鉄器	馬具	轡		柄 6.4	0.9	1.1	
M36	鉄器	馬具	轡	石室内埋土	柄 5.2	柄 1.3		
M37	鉄器	不明	不明		5.4	4.0		
M38	鉄器	不明	不明		4.4	2.4		
M39	鉄器	不明	不明		柄 2.8	柄 2.0	柄 1.4	
M40	その他	鍔身具	耳環		2.3	2.6	0.4	鍔心金貼
M41	その他	鍔身具	耳環		2.5	2.6	0.5	鍔心金貼
M42	その他	鍔身具	耳環		2.8	3.0	0.6	鍔心金貼
M43	その他	鍔身具	耳環		2.6	2.8	0.6	鍔心金貼

出土玉類 法量表

番号	種別	分類	遺構	全長 (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	備考
T1	玉	勾玉		1.6	1.1	0.6	ガラス製

その他遺物 法量表

番号	種別	分類	遺構	全長 (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	備考
1	不明		石室奥床面直上	1.6	1.4	1.2	
2	不明		石室奥床面直上	2.5	1.8	1.4	
3	不明		石室奥床面直上	2.6	2.0	1.2	
4	不明		石室奥床面直上	2.9	2.2	1.2	
5	不明		石室奥床面直上	3.1	1.5	1.0	
6	不明		石室奥床面直上	2.9	1.5	1.2	
7	不明		石室奥床面直上	1.9	1.6	1.0	
B.1	骨	人骨		5.0	2.0		

写真図版



遠景（東から）



全景（北から）



前庭部土器出土状況（東から）



前庭部土器出土状況（北から）



周溝検出状況



周溝確認調査状況



石棺除去後状況



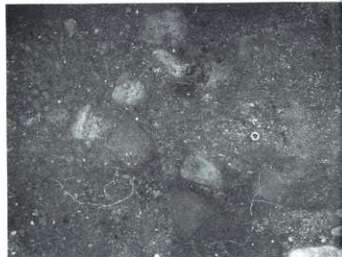
石棺下遺物出土状況



羨道部から奥壁（西から）



石室奥壁付近



耳環、高环蓋出土状況



奥壁付近排水溝



開口部から石室



石室内作業風景



排水溝検出状況（西から）



排水溝検出状況（東から）



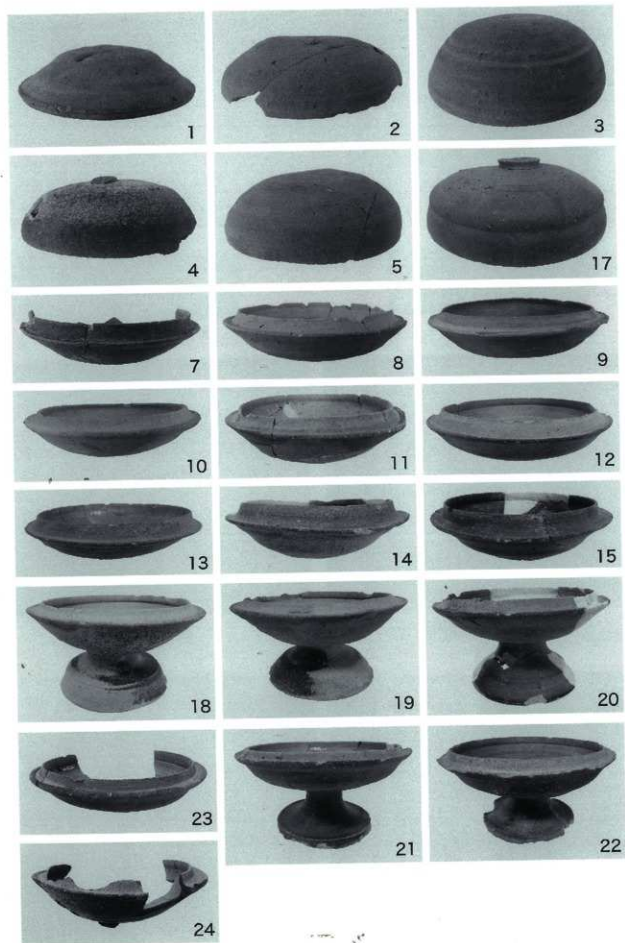
石室内（西から）



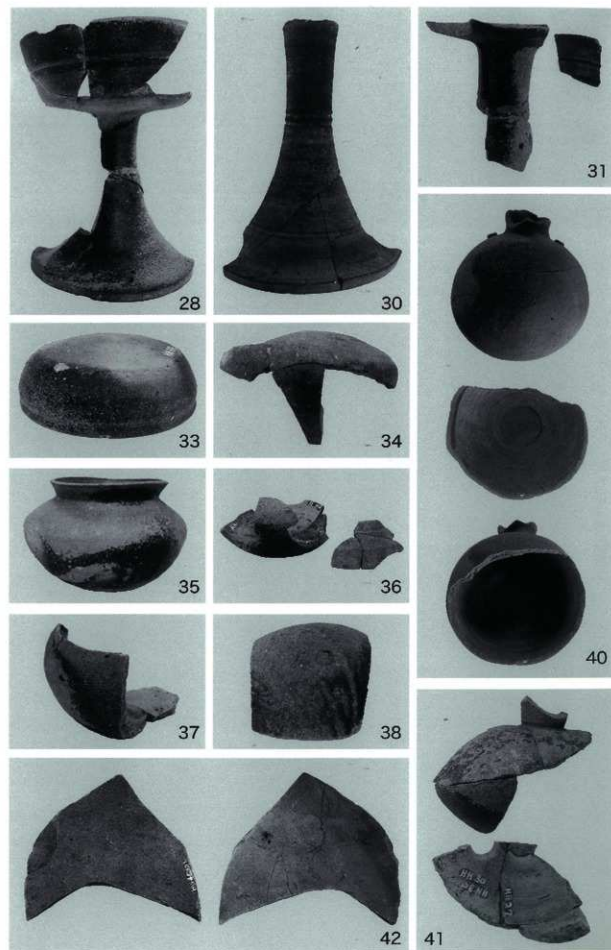
復元作業（南西から）



復元作業（北東から）



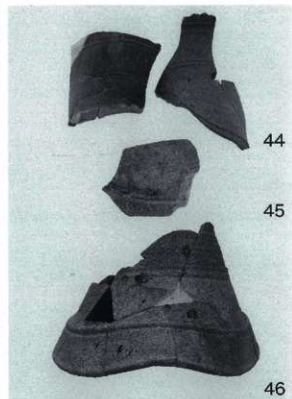
出土遺物 1



出土遺物 2



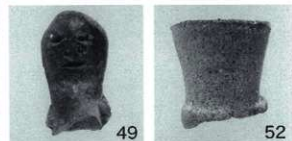
43



44

45

46



49

52



51

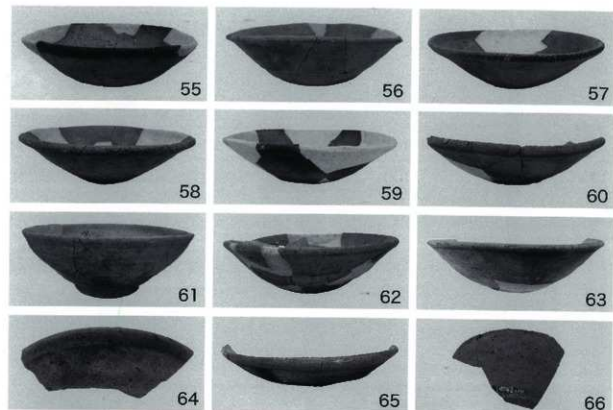


54



子持器台高坏

出土遺物 3



55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

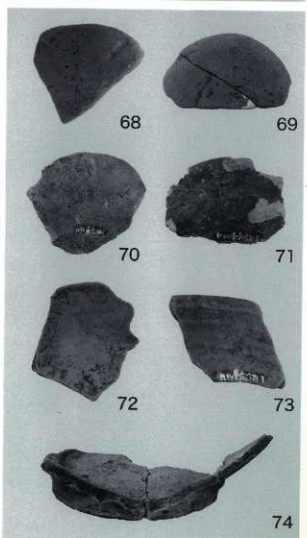
66



67



75



68

69

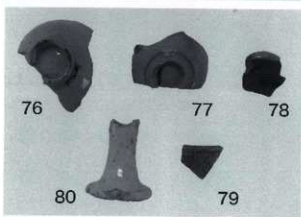
70

71

72

73

74



76

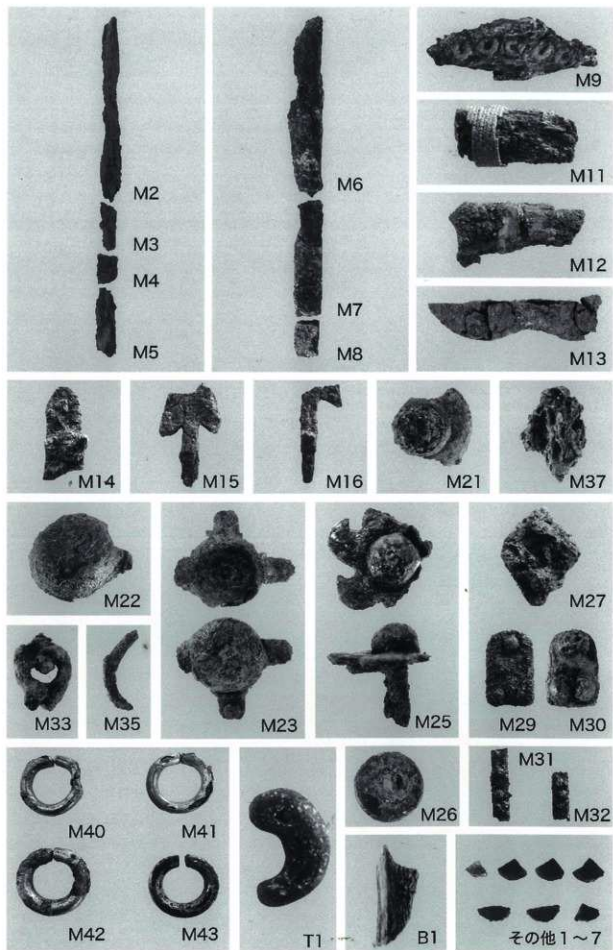
77

78

80

79

出土遺物 4



出土遺物 5

報告書抄録

ふりがな	ひがしひろはたこふん いち
書名	東広畑古墳 I
副書名	
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財調査報告書13
シリーズ番号	13
編者名	樋口 碧 古田 陽 (現姓 小船井)
編集機関	福崎町教育委員会
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1 TEL.0790-22-0560
発行年月日	2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしひろはたこふん 東広畑古墳	ひょうごけんしんさきぐんみなとくさきまち 兵庫県神崎郡福崎町 南田原字東広畑626	28443	410028	34度 57分 41秒	134度 46分 1秒	1993年 7月6日 ～ 1993年 8月31日	100㎡	塚場整備
						1995年 3月15日 ～ 1995年 3月29日	60㎡	塚場整備
						2002年 10月1日 ～ 2003年 3月31日	100㎡	遺跡整備
						2008年 9月 ～ 2008年 12月	10㎡	古墳公園
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東広畑古墳	古墳	古墳時代後期	横六式石室	須恵器(裝飾付須 恵器・杯・高杯・ 短頸壺)・金属器 (象嵌柄頭・大刀・ 馬具・鉄鏃・耳 環)・勾玉ほか				
		中世以降		須恵器・土師器・ 陶磁器				

2015年3月31日 印刷
2015年3月31日 発行

東広畑古墳 1
福岡町埋蔵文化財調査報告書13

著作権 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1
発行者 福崎町教育委員会

印刷者 クリヤ印刷所

